

## 亡き息子が導いてくれた道。

岡山教会 岸本光央さん

平成24年、岸本光央さんの長男・浩一さんが、すい臓がんにより39歳の若さで急逝。妻と三人の子どもが遺された。「どうして嫁や孫たちはこんなにつらい目にあうんだ」…出口の見えない暗闇のなかに迷いこんだ岸本さんの前に差しこんだ一筋の光明が、法華經の教えだった。たくさんの教本を読みあさり、まさに乾いた土が水を吸いこむかのように世の理や命の尊さ、人としての生き方などを吸収していった。そして、自分の悩みを解消したいという気持ちは、広く人の役に立ちたいという思いへと変わり、その実践に生きがいを感じるようになる。いま岸本さんは、「長男を失った痛みは一生消えませんが、私の生き方が変わり、人さまのために歩む尊い道に気づかせ導いてくれた長男は、ほんとの仏さまだなと感じます」と語る。



## ともに悲しむ心

九月のいまごろのことを、暦こよみのうえでは「白露はくろ」といいます。朝の草花に宿った露つゆが、日光をあびて輝くさまのことですが、露には「露の世」という言葉に見られるように、はかない印象もあります。

法華經の「如来寿量品にらいじりょうほん」の掉尾ちようびを飾る、「何を以てか衆生しゆじやうをして 無上道むじやうどうに入り 速すみやかに仏身ぶつじんを成就じやうじゆすることを得えせしめんと」(どうしたら、衆生を仏の道に導き入れることができるだろうか。どうしたら早く仏と同じ境界けいがいに達せしめることができるだろうか)の一句は、露のようにはかなく思える無常むじやうの世にあつても、「悲しみにくれる人がいないように」「だれもが仏性ぶつじやうに目ざめて救われるように」と願う、仏の切なる思いを伝えているのです。

私たちは、はるかな過去から生まれ変わり死に変わりするなかで、いま、ここに生かされています。それは、善よいことも悪いことも含めた過去の経験けいけんを内包ないほうしつつ、私たちが仏と同じ「永遠のいのち」を生きているということです。善も悪ももちあわせる私たちの、だれにも共通するのは、仏性という揺るぎない本質です。だからこそ、私たちは他の仏性が輝くようなふれあい、とりわけ悲しむ人に喜びを与える縁となる実践が、大切だと思うのです。

# 立正佼成会